

男声合唱団「昴」 第12回コンサート 歌詞・曲目解説

春を待つ 伊藤 整/詩

伊藤整の第一詩集「雪明かりの路」より。北海道の厳しい冬、つかの間の陽だまりの暖かさに、春を待ち焦がれる作者の思いがやさしく広がっている。1960年 多田武彦が男声合唱組曲「雪明かりの路」として6つの詩に作曲。「春を待つ」は「その一」の曲である。

ふんわりと
雪の積もった山蔭から
冬空が きれいにきれいに
晴れ渡っている

うっすら寒く 陽はあたたかい
ひなたぼっこする
まつげの先に ぼっと
春の日の夢が咲く

しみじみと 陽のあたたかさは
身にしむけれど
真白い雪の山越えて
春のくるのはまだ遠い

夕 焼 け 高田敏子/詩

日常生活を平易な言葉で綴った高田敏子。「戦争に伴う厳しい経験を経てきた」と自ら語ったように、その言葉には彼女の人生に裏打ちされた確かな想いが流れている。この作品からは、やさしい言葉の中に平和への願いが、静かにつよく伝わってくる。



夕焼けは ばら色
世界が平和なら
夕焼けは
どこの国から見ても
どこの町から見ても
夕焼けは ばら色

夕焼けが 火の色に
血の色に見えることなど
ありませんように。

浜辺の歌 林 古溪/詞

日本で初めて子どものための童謡「カナリヤ」を作曲したのが成田為三である。この作品は少ない言葉に抑揚のあるメロディで、音楽の教科書には必ず載るような国民的な愛唱歌となっている。

あした浜辺を さまよえば
昔のことぞ しのばるる
風の音よ 雲のさまよ
寄する波も 貝の色も

夕べ浜辺を もとおれば
昔の人ぞ しのばるる
寄する波よ 返す波よ
月の色も 星の影も



ね が い 佐藤 信/詞

1982年、ポーランド民主化のために活動していた自主管理労組「連帯」支援コンサートで発表された。ピアノ伴奏にポーランドの国民的作曲家であるシヨパン風の断片をちりばめ、終わり近くに力強いピアノ独奏でポーランド国歌を取り入れている。林光の「ソング」と呼ばれる膨大な作品の中の1曲である。

小さな川に 赤い花流そ
岸辺に咲いた 名も知らぬ願い
岸辺に咲いた 名も知らぬ願い
揺れる川面に 冬の空映る
流れていくよ もひとつの願い
流れていくよ もひとつの願い

小石を拾う 若者一人
気づかず踏んだ 待ち続けた願い
気づかず踏んだ 待ち続けた願い
暗い水底 凍える夜に
青ざめ沈む 忘れられた願い
青ざめ沈む 忘れられた願い

揺れる川面に 冬の空映る
流れていくよ もひとつの願い
小石を拾う 若者一人
気づかず踏んだ 待ち続けた願い
暗い水底 凍える夜に
青ざめ沈む 忘れられた願い

小さな川に 赤い花流そ
明日もひとつ 赤い花流そ
明日もひとつ 赤い花流そ